思うがままに、
自分で書き、
ただ自分だけの心にひそめ、
何年か過ぎて、
忘れた頃に、
再び、
ありし頃の自分の姿を
文の中に見つけだし、読むこの文、
それは美しい文でもなく、
また有名な文でもない。

ただ、自分が書き、
ただ自分だけが読む
単純な平凡な文である。

「しかし、そこに自分が書いた。」
という宝が
その文の中にある。

昔の姿が消えても、
文の中に生きる昔の自分の姿は残る。

昔は二度とない。

しかし、文の中に生きる昔は
いつまでも生きている。

書き記されたその時から
自分の心のなかに。

2 私は日記を書く・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・12

Candy
in the Heart
015

萩原良昭